

巻頭言

「21世紀への平和路線」の精神を再び

創価大学平和問題研究所 所長 玉井秀樹

2023年11月15日、創価大学創立者である池田大作先生が逝去された。衷心より哀悼の誠を捧げ、本研究所発展のために多大なるお力をいただいていたことに深く感謝申し上げるものである。個人的なことで恐縮ではあるが、池田大作先生の御指導と励ましを受けて今日の私があることを思い、感謝の思いは尽きない。偉大なる師を亡くした悲しみは尽きないが、本研究所のより一層の発展をもって御鴻恩に報いていきたい。

池田大作先生が示してくださった本研究所の指針となる論考が「21世紀への平和路線」である。1979年2月20日付で刊行された『創大平和研究』創刊号への特別寄稿であり、2024年で発表から45年の節目を迎える。個人的にも、研究所としても折にふれ学んできた「21世紀への平和路線」であるが、今だからこそ、再びこの論考に学び、その今日的意義を訴えていくことが必要であると考えます。

2019年8月にタイのタマサート大学で開催された本学との共同セミナーで、私は本研究所の取り組みについて報告する機会を得た。その年、発表から40年となった「21世紀への平和路線」の内容を紹介し、本学における平和学の在り方の指針となっていることを申し上げた。

1979年という年は、欧州における核戦力をめぐる米国（NATO）とソ連の対立が深まる中、ソ連がアフガニスタン侵攻を始めたことで米ソ関係の悪化が決定的になったときである。その結果、同年に調印されていた第二次戦略兵器

制限条約（SALT II）は批准されないままに終わり、いわゆる「新・冷戦」という欧州核戦争の危機に突入していくことになる。それ以外にも、中越紛争という社会主義世界の対立、イラン革命政権樹立という反米イスラム勢力の登場、といった今日の国際情勢を形成する諸要素が生まれた大きな変化の年でもあった。

タマサート大学での報告では、「21世紀への平和路線」には、このような時代状況に対する基本的思想が提示されているということを、以下のように申し述べた。

論稿の冒頭で、「戦争を廃絶し、平和を追求しなければならない」ことを主張されます。それは、戦争がもたらす破壊と殺戮が、これまでの戦争正当化の理由を全く無意味にするほどに甚大な規模になってしまったからである。そして、このような戦争の変質は「人間が兵器を使うというよりも兵器に人間が使われる傾向が増大し、人間そのものが、兵器や戦争の全き支配下に置かれるようになってきた」ために生じたもので、このような人間支配をする戦争文明の行きつく先が核戦争の脅威であることを指摘されています。

40年前においてすでに国際社会に人間性を復権させることこそが、人類的課題克服の鍵となることを指摘されていることを確認しておきたいと思います。池田先生の平和提言では一貫して、「人間をいかにして取り戻すか」が示されてきました。池田先生が言われる「人間性」、「ヒューマニティー」、「人間主義」とは、エゴイスティックな人間中心主義ではありません。利他と創造性にあふれる働きをさして本来の「人間らしさ」といわれています。

池田先生は、核戦争の脅威を高め、人々を殺戮してかえりみない残虐な人間の性を冷徹に見据えたいうで、そのような人間を見放すのではなく、人間を利他と創造の善なる存在へ変革するという道を提示されます。傲慢な自尊心から他者を自らの欲望成就のための手段・犠牲としてかえりみない修羅の命を制御する強い生命、他者を幸福へ導くことを自らの喜びとす

る慈悲の生命こそが、「人間」の徳性であるとし、この善なる人間存在の追求を訴えられているところに、仏法者としての池田先生の創造性が表れていると思います。

「21世紀への平和路線」では、この人間性の復権ということを踏まえた上で、取り組まれるべき課題として、「平和憲法の遵守」「南北問題」「国際機構」といった6項目を取り上げ、論じられている。その要点は以下のようにまとめられるであろう。

1. 平和憲法の遵守

日本が世界に誇る平和憲法を遵守し、その精神を内実化させるとともに、世界の共有財産にしていくこと。憲法の精神は、恒久平和を謳うとともに、国際紛争のガンともいふべき、相互の不信を信頼に変えていくことを根本にしているからである。

2. 南北問題

つねに戦乱の危機を秘めているアジア、アフリカ、中南米等の経済的向上と生活、政情の安定を実現すること。そのために、先進諸国は、それらの国が平和・安定・自立をめざす方向で、可能な限りの援助、協力をなすべきである。

3. 国際機構

国連の権限を強め、軍備管理等の機能を高めるとともに、それを当面の場として、新たな世界秩序への統合化のシステムを探ること。ただしその場合も、力によるものであってはならない。

4. 「地域」「地方」の活性化

国内的に言えば地域や地方、国際間でいえば各民族の、自主性、自立性を最大限に尊重すること。その民衆次元の草の根民主主義なくして、安定した世界平和を求めることはできない。

5. 平和のための教育

平和のための教育の重要性。とくにその教育は、日常生活全般にわたつ

て行われるもので、自らの内なる生命の魔性に打ち勝つことを第一義とすべきである。

6. 個の尊厳の理念

国家や集団に対する、個の尊厳の理念が確立されていかなければならない。それには、一個の人間の尊さを説くとともに、人間社会総体の変革を主導する理念、真実の世界宗教ともいべきものが、時代の要請となってくるであろう。

「21世紀への平和路線」では、こうした課題を克服して平和を創るために教育と宗教の重要性を指摘し、以下のように結ばれている。

人間は、制度であれ核であれ、自ら作り出したものの奴隷となつてはならない。人間が主役なのである。一個の人間の内なる変革は、その必然的波動、必然的帰結として、政治、経済、文化、教育等のあらゆる側面に価値観の転換をもたらしていく。それは人間を主役とした人類総体のトータルな発想の転換である。そこにこそ、核という“外から”の衝撃をはね返す“内から”の対応の原点があると私は信じている。

この過去から現在、未来へわたる歴史の流れのなかにあつて、我々の果たすべき使命は何か――。人間以上の尊厳なるものはない、生命以上の宝はないとの不滅の原点に立って、人間の善性を信じ、触発し、啓発しゆくことをおいて、他にあるまい。

未だロシアのウクライナ攻撃は止まず、停戦の道筋は見えない。中東・ガザでのイスラエル軍による攻撃も続き、中東地域の対立を深め、国際情勢へも悪影響を与えている。前世紀の凄惨な世界戦争から100年を経て、人類は再び戦火の愚行を忘却してしまうのであろうか。しかも、人新世に突入した今日の世界は、我々人類が自分たちの住まう地球を生命の住めない星にしてしまいかねないという100年前とは全く異なる状況にある。悲観的に見れば人類（そし

て、その巻き添えとなる様々な生命)の生き残りは極めて困難と言わざるを得ない。

その一方で、人間の理性は、お互いに尊重し、分かち合い、連帯することで、存亡の危機を乗り越えることができることを認識している。それは国際社会における普遍的規範として形成されているのであり、その規範に則った行動で危機を乗り越えるべきことを示している。池田先生が「21世紀への平和路線」に示され、その後の平和提言などで一貫して指摘されていたのはこのことであろう。

「創造的な人間性」に従うことのできない人間のもう一つの側面をどう転換するのか、平和学の学徒としてさらなる探求に挑んでいきたい。

(2024年2月20日記)